

B-160 沖永良部島に伝わる衣裳についての考察

大谷女子短大 被服 ○橋本今栄子

琉球大学 教育 渡口文子

目的 琉球王朝時代には南西諸島一円は琉球の支配下にあり、政治、神事、風習も琉球同様であった。沖永良部島は琉球に近く、年始め毎に、のろ始め役人等は長く琉球との往来があった。薩摩藩統治下（17世紀後期以降）においても、なお冊封使来島には使者を送ったと多くの文献に見られる。古衣裳の形態、計測の調査により、琉球衣裳との比較によって年代の考察を行なった。

方法 沖永良部島駐布在に伝わる衣裳（大袖）3点及び裃衣3点を資料とし、その形態、計測をし琉球の古衣裳との比較検討を行なった。

結果 沖永良部島の古衣裳については、所有者から衣裳についての伝承は聞けなかった。形態、計測上にも琉球の上級階級の衣裳と思われる。理由としては、材質、文様等、特に裃衣には時代の古さが見られるからである。身頃から競き裁ちされた袖（きものスリーブ）、衿の付け方、前衽、脇明の襷の入れ方（7つ、5つ）等は琉球独特の縫製が見られ、着用された時代は16世紀から17世紀頃と考えられる。